

抹茶ぼうろ

西暦3014年、地球上の人間はすでに死に絶えていた。その数百年前にとある強力な病原体が発生し、瞬く間にありとあらゆる人間の命を侵食した。当初研究者たちは病原体に対抗できるワクチンや薬を開発しようとしたが、どんなに優れた技術を駆使しても、その病原体を滅することはできなかった。

人間たちは、これは神様が自分たちに与えた罰だと考えた。無意味な戦いをし、自分たちの利益だけを考え、地球を汚してきたことに対する天罰だと。

これまで人間たちは科学技術を次々と開発し、様々な国と国は自国の科学技術を誇示せんとばかりに化学兵器を作り、戦争をしてきた。人間の開発した科学技術は環境を破壊し、海を汚した。およそ1000年の間に人間は地球から縁を、そして多くの動物たちの命を奪った。彼らは死を受け入れるとともに、これまでの自分たちの行いをひどく悔やんだ。そして残された時間を使い、

せめてもの罪滅ぼしにと、その当時科学技術と共に発達していた機械技術の全てを駆使して、ロボットを開発した。地球を綺麗にし、動物たちと共存するロボットを。ロボットたちの姿は人間のそれをきわめて忠実に再現していた。

やがて人間は絶滅し、地球上にはロボットと数少ない動物たちだけが残った。ロボットたちは人間が生前に組み込んだ地球環境保全のプログラムを、人工知能らしく極めて忠実にこなした。かつて人間が使用していた破壊兵器を分解し、環境に有害な化学物質を、安全な処理を施したあとで地中へと埋めた。

ロボットたちは心こそ持たないものの、基本的な喜怒哀楽の感情を感じることができるようになられていた。そして人間に非常によく似た機能を持ち合わせていた。彼らはかつて人間が住んでいた都市を利用して暮らした。必要なときは人間が残した書物を読んで知識を得た。地球に害を及ぼさない方法で電気を供給し、草花に水を与えながら、慎ましく生活した。彼らはプログラミングされた通りに、地球を慈しんだ。

やがて地球は少しずつではあるが、美しさを取り戻していった。茶色く濁っていた海はかつてのように青く輝き、地上には何百年かぶりに緑色に覆われはじめた。

※※※※※

あるところに、綺麗になりたくてしかたのないロボットがいた。ロボットはかつてこの世にいた人間の女性に極めて近い容姿をしていた。

ロボットは綺麗になるために様々なことを試した。毎朝顔に蠟を塗り、金属でできた顔をツルツルに磨いた。体重が軽いほうが美しい、と書物に書いてあれば、一日のオイル摂取を、一般のロボットたちが平均的に摂取する量の半分にした。また人間の美しい女性たちの写真が載ったある薄い書物に「美容のための太極拳&ヨガ特集！」という頁を見つけたので、毎朝ギョギョと金属質の音を立て欠かさず太極拳を練習し、夜寝る前には深呼吸をしながら「大樹のポーズ」を行った。

その結果、ロボットは道を歩けば通りすがりのロボッ

トたちが振り向くほどの美貌を手に入れた。

最初のころは鏡に映る自分の姿を見るたび、周りのロボットたちから注目を集めるたびに喜びを覚えた。しかし、どれほどの美貌を手に入れても、彼女は満たされることはなかった。簡単な感情を持つていえるとは言え、ロボットである以上はそもそも満足する心がないのだから、それはある意味では当然のことだった。

彼女は無い心を満たそうと、さらに美しさを求め続けた。地上に未だ残っている汚染物質を処理し、草花に水を与えるという役目を忠実にこなしながらも、それ以外の時間は古い書物を読み漁り、綺麗になる方法を研究し、実践した。頬の余分な金属を除去し、瞼を二重に工事した。彼女はさらに美しくなっていた。しかし彼女は決して満足することはなかった。世のロボットたちも、はじめこそ彼女の美貌に目を奪われたが、それで終わりはなかった。彼らは基本的な喜怒哀楽の感情は持ち合わせていたが、目に入ったものに惹かれ、魅了される感情を抱くことはなかったのだ。

あるとき彼女はふと疑問を抱いた。そもそも何故自分

は綺麗になりたくて仕方がないのだろうと。

彼女は自らが作られたときのことを覚えていなかった。気付けばプログラムに従って汚染物質を処理し、草花に水をやりながら、他のロボットと同じように慎ましく暮らしていた。そして、その間当然のように綺麗になりたいとずっと願っていたのだった。

彼女は、かつてこの地球上に存在していた人間の手によって誕生したときのことを思い出せば、自分が綺麗になることを望んでやまないその訳も分かるのではないかと考えた。しかしどんなに頭の中の記憶を引き出そうとしても、生まれたときの記憶は蘇らなかった。

ある日、彼女はいつものように郊外に咲く花に水やりをしていた。すると遠くから、悲鳴と共に耳をつんざく爆発音が聞こえた。ロボットがまだ地上に残っていた環境汚染物質を処理している最中にミスをし、急激な化学反応により爆発を起こしたのだった。爆発音は次第に大きくなり、彼女の方へ近づいてきた。

逃げろという仲間のロボットの声を聞く前に、彼女は爆風を受け吹き飛ばされた。そして木の幹に頭を強く打ち付け、意識を失った。

「おい！ 大丈夫か、しっかりしろ！」

彼女が目を見ますと、そばに仲間のロボットの一人がいた。

「お前は気を失っていたんだ、でも意識が戻ってよかった。しばらく休んでいるといい、辺りの修復作業に手は足りている」

仲間のロボットはそう言い、去って行った。

彼女は爆発によって飛び散った瓦礫の撤去作業を眺めながら、何故自分が綺麗になりたかったのかの答えをもう知っていることに気付いた。彼女は頭を強く打ったことよって、なくしていた記憶を取り戻していた。

※※※※※

まだ人間が地球上に存在していた時代に、一人の研究者が最愛の妻を失った。死因は研究中の爆発事故だった。彼は自らの研究における不慮の事故で、妻を死なせてしまったのだった。

彼はただひたすら亡き妻を思い出しては悔やみ、来る日も来る日も泣き続けた。研究をすることもやめてしまった。

そんな中、謎の病原体が人間を侵食した。彼は医薬品開発の研究者であったが、妻が亡きあとの世界のことなどどうでもよかった。病原体は瞬く間に世界中へと広がっていき、やがて人間は自分たちの終わりを悟り、自分たちのこれまでの行いをひどく悔いた。

研究者はずっと泣いていたが、人間が近いうちに絶滅することを知り、あることを思いついた。彼は医薬品開発の他に、人工知能開発の技術も持っていた。

彼は一体のロボットを作った。生前の妻に似た、若い女のロボットを目の前に、彼はまた泣いたが、やがてロ

ボットに弱々しく微笑みかけた。

「君は、僕が死ぬまで僕のことを愛してくれるかい？」
「ええ、私はあなたが死ぬまであなたのことを愛すわ」

彼はロボットを抱き締めた。金属で出来た体が、少しだけ温かみを帯びた。

彼も世の中の人々と同様に、不治の病原体に体を蝕まれていた。彼は自分が死ぬその瞬間まで、妻の姿によく似たロボットと共に過ごすことにした。

「なんて君は素敵なんだ」
「ありがとう、あなたもとても素敵よ」

ロボットは研究者の望む言葉を望むタイミングで発した。

研究者は、最初は妻にそっくりのロボットを慈しみ、愛した。しかし所詮は人工知能、プログラミングされたように、あたかも人間を愛しているかのように振る舞うことはできたが、本当の意味で愛することは決してでき

なかった。ロボットに簡単な喜怒哀楽の感情を組み込むことはできたが、人を愛するという感情を組み込むことは、当時の高度な技術でもできなかった。彼らは子孫を残す能力を持たないので、それは再現することが不可能であると同時に、ある意味 unnecessary 感情だった。

彼女を愛そうとすれば愛そうとするほど、研究者の虚しさは次第に増えていった。彼はロボットを作ったことを後悔し始めていた。

「ねえ、あなた。私のこと好きかしら？」

「ああ、好きだとも」

「嬉しいわ、私もあなたのこと好きよ」

「そうかい」

「今日はなんだかつれないわね」

「君は、本当は僕のことを愛してなんかいないさ」

「そんなことないわ、どうしてひどいこと言うの」

「うるさい！ 無能なロボットのくせに！」

研究者はロボットを壁に突き飛ばした。無機質な金属が床に崩れ落ちていく音に、彼の虚しさと苛立ちは倍増した。

「君の言葉は全て偽りだと、僕は知っているんだ」

「そんなことないわ、好きよ、愛してるわ」

「もうたくさんだよ」

「どうして、私の何がいけなかったの、人間のような美しさかしら、心持つ者の誠実さかしら、それとも、もっとあなたに尽くせばよかったのかしら」

「ああ全てさ！ もうどうだったっていいんだ、君は妻にとってもよく似ていたけど生前の彼女の美しさには決してない、どんなに誠実に振る舞い僕に尽くしてくれたとしてもそれは僕がそうするように君を作ったからだ。なんて馬鹿らしいことを僕はしていたんだろう」

「そんなことないわ、愛してるわ、本当よあなた」

「黙れ！」

彼はそばにあった木製の椅子を彼女に振り下ろした。床に様々な部品が飛び散り、ロボットの上半身は完全に破壊された。

「ごめんなさい……人間のようになれなくて、あなたの妻のようになれなくてごめんなさい、ゴメンナサイ、ゴメ……ナ……サイ」

ネジの狂ったラジカセのようにその言葉を繰り返しながら、彼女は壊れた右手で床に散らばった部品をかき集めようとした。しかし、ジーツ音を立て、やがて動かなくなった。

彼は茫然とその場に立ち尽くしていたが、ふと我に返った。

「私は…私は何ということ…！ また過ちを犯してしまったのか……」

立ち尽くす彼を、突然眩暈が襲った。潜んでいた病原体が、いよいよ彼の体を蝕み始めたのだった。混濁する意識の中をしばらくさまよったあとで、彼はロボットの後を追うように動かなくなった。

発見された研究者の死体は、政府の組織によって回収された。病原体の広がりはずさまじく政府はたくさん死体を回収しなければならなかったため、死体の処理はできる範囲で、機械的に、速やかに行われた。

死体のそばにある、破損し動かなくなっていたロボット

ともまた、政府の組織によって回収された。

ロボットは修理され、他に作られた何万というロボットたちと同様に、地球環境保護プログラムを組み込まれた。巨大なベルトコンベヤーに乗せられ、様々な処理が施された後、真っ白な部屋に運ばれた。

「認証試験完了、特に異常はありません。D-257機の記憶をデリートしてください」

最後に、プログラムを適切に遂行するうえで支障の無いよう、それまでの記憶を全て消去された。

※※※※※

彼女の研究者と過ごした記憶は、完全に消されていたはずだった。しかし何の因果か、頭を強く打ち付けた拍子にそれが全て復元されたのだった。そして自分が綺麗になりたくてしかたのなかった理由を知った。彼女はロボットだったので人を愛することはできなかった。それでも、研究者への、彼への想いは決して偽りではなかつ

た。

あるはずのない心が、締め付けられるように痛い気がした。人工知能は痛みを感じることはできないはずなのに、何故かそれを痛みだとはつきりと認識した。

ふいに、彼女は自分の頬が濡れていることに気付いた。雨かと思つて空を見上げたが、頭上には突き抜けるように真っ青な空が、一面に広がっているだけだった。

彼女が頬の水滴を拭おうとすると、ガラスで出来た目から水が一滴、ぼろんと零れ落ちた。さらに反対の目からも、ぼろんぼろんと水が零れ、彼女の肌をさらに濡らした。ロボットに涙を流す機能は組み込まれていないはずだった。それでも、彼女の両目からは流れる雫は止まらず、しまいには川のように頬を伝い始めた。何度拭つても、止まなかった。

ロボットは泣き続けた。いつの間にか涙を拭うことをやめていた。

爆発によるがれきの撤去作業が終わり、辺りにロボットの姿は見えなくなった。夜が来て、また朝が来た。彼

女はただひらすら、そうすることしかできないみたいに涙を流し続けた。

もう彼女は綺麗になることを望まなかった。望む必要がなかった。いつしか彼女の美しい白い肌には赤い斑点が浮かんでいた。そしてそれは彼女の顔全体、体全体へと広がって行った。彼女は金属質でおおわれたロボット、水に濡れば当然のように錆びた。

やがて涙が零れなくなったところ、濡れた肌は全て赤錆でおおわれた。青空を二羽の小鳥たちが楽しげに飛び回っていた。美しい世界のさえずりを聞きながら、彼女の体は全ての活動を停止した。

第三回突貫企画工事号

2014年10月27日発行

編集人 渡科由太

印刷所 広島大学文団BOX